【578】

氏　　名	深田　智（ふかだ　ちえ）
学位(専攻分野)	博士（人間・環境学）
学位記番号	人博第142号
学位授与の日付	平成14年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科人間・環境学専攻
学位論文題目	The Cognitive Basis of Semantic Extension in Natural Language—With Special Reference to Conceptual Metaphor and Metonymy in English— （自然言語における意味拡張の認知的基盤——英語の概念メタファーとメトニミーを中心に——）
論文調査委員	（主査）教授 山梨正明　助教授 三谷恵子　助教授 北山　忍

論文内容の要旨

本論文は，認知言語学の意味論の枠組に基づいて，日常言語の意味の拡張のメカニズム（特に，視覚と空間認知にかかわる言語表現の意味の拡張のメカニズム）の解明を試みた実証的研究である。全体は，5章から成る。

1章では，本研究の分析の基本的な枠組である認知言語学のパラダイムの基本的な概念の理論的な位置づけと認知言語学の実証的な研究の展望が論じられる。2章では，言語現象に関する記述の妥当性と説明の妥当性の観点から，本研究の言語分析の背景となる認知言語学の枠組に基づく基本的な意味モデルが検討される。特に，この章では，3章以降の日常言語の意味拡張と意味変化にかかわる言語現象を記述し，定式化していくための意味モデルとして，イメージスキーマ・モデル，メタファー・モデル，メトニミー・モデル，放射状カテゴリー・モデル等の理論的な位置づけと実証的な検討がなされる。

3章は，日常言語の意味の拡張にかかわる言語現象の中でも特に注目される現象として，視覚表現の多義性にかかわる意味拡張の諸相を，2章において導入された各種の意味モデルに基づいて分析している。3章の前半では，まず多義的な視覚表現の注目すべき事例として，英語のsee, look等の視覚にかかわる動詞群，目に代表される視覚器官にかかわる言語表現，視点・視界にかかわる言語表現の意味の拡張のプロセスを体系的に分析している。この種の言語表現の意味は，基本的に視覚にかかわる字義通りの意味から，理解や認識を中心とする認知主体（ないしは知覚主体）の主観的な意味に変化している。これまでの言語学の研究では，この種の意味拡張と意味変化に関し，個々の事例に関する観察と記述はかなりの範囲に渡ってなされているが，どのような経験的な動機づけによって問題の意味変化が起こるのか，問題の意味拡張の背後には言語主体のどのような認知プロセスがかかわっているのか，プロトタイプ的な意味と派生的な意味の関係からみて多義的な意味相互の分布関係はどのようになっているか，に関する体系的な分析はなされていない。従来の視覚表現の意味拡張と多義性の代表的な分析としては，認知意味論の枠組に基づくSweetserのメタファーの意味モデルによる分析が挙げられる。この分析では，視覚動詞とこれに関連する言語表現の意味拡張（特に，視覚にかかわる字義通りの意味から理解や認識を中心とする認知主体ないしは知覚主体の主観的な意味への転義）は，知覚の経験のドメイン（例えば，SEEINGのドメイン）から高次の認知ドメイン（例えば，KNOWINGのドメイン，UNDERSTANDINGのドメイン）への比喩的な変換の認知プロセスによって規定される。このメタファーの意味モデルに基づく分析は，問題の変換の対象である知覚の経験のドメインと高次の認知ドメインの間に，比喩的な変換を可能とする類似性の認識が存在することを前提としている。これに対し，3章の後半では，この類似性の認識を前提とするメタファー変換による視覚表現の意味規定の本質的な問題を指摘している。本研究では，視覚動詞とこれに関連する視覚表現の多義性と意味変化の広範な言語データの分析に基づき，知覚から認識，理解の意味に至る視覚表現の転義の基盤は，より具体的な経験のドメインからより主観的で抽象的な経験のドメインへの転移の認知プロセスを可能とする近接性の認識に拠っている点を明らかにしている。また，本研究では，この近接性の認識に基づく視覚表現の転義のプロセスをメトニミー変換の転移関係によって再規定し，視覚にかかわるプロトタイプの意味と認識，

理解等の派生的な意味の分布関係を，放射状カテゴリーのネットワークモデルによって一般化している。

4章は，認知言語学の意味論の観点から，さらに知覚の経験に基づく意味現象として，空間のドメインからの移動，出現にかかわる言語表現の意味の転義と拡張（特に，appear, come out, emerge 等の動詞群とこれに関連する移動，出現にかかわる言語表現の字義通りの意味から思考，判断等の意味への派生的な転用）のプロセスを分析している。移動，出現にかかわる言語表現の意味は，基本的には空間領域を境界によって限定する物理的なドメインを背景として規定される。この種の物理的な空間のドメインは，字義通りの意味として日常言語に直接的に反映されるのではなく，外部世界に対する認知主体の主観的な認識のプロセスを介して意味づけされる。本章の前半では，物理的な空間のドメインが，認知主体によって主観的に意味づけされ，日常言語の意味体系に組み込まれていく過程を，以上の移動，出現にかかわる言語表現の広範なデータの分析を通して，(i)物理的な空間のドメインから容器のイメージスキーマが形成される段階，(ii)容器のイメージスキーマの内側のドメインが背景化され，外側のドメインが前景化される段階，(iii)容器のイメージスキーマがメタファー的な変換により視界のドメイン，認識のドメイン等に変換されていく段階，(iv)容器のイメージスキーマのドメインの一部が，プロファイル・シフトの認知プロセスによって焦点化されていく段階に区分している。4章の後半では，この種のイメージスキーマの発現，変換，前景化・背景化，焦点化の認知プロセスを反映する意味の拡張のリンクに基づく多義性のネットワーク・モデルを提示し，このネットワーク・モデルに基づき，移動，出現にかかわる言語表現の原義と派生的な意味の分布関係を明らかにしている。また，以上の原義と派生的な意味の相互関係を明らかにすることにより，これまでの言語学の意味研究で混同されていた，多義性に関する二種類の意味現象（類義性にかかわる現象と同音異義性にかかわる現象）を体系的に区別する経験的な基準（即ち，イメージスキーマの発現，変換，前景化・背景化等の認知プロセスを反映する意味の拡張のリンクに基づく多義性の経験的な基準）を提示している。

5章は，本研究の意味分析に適用されたメタファー・モデル，メトニミー・モデル，放射状カテゴリー・モデル，多義性のネットワーク・モデル等の理論的・実証的な検討がなされ，本研究の意義と展望が論じられている。

論文審査の結果の要旨

本学位申請論文は，認知言語学の意味分析に基づいて，視覚と空間認知にかかわる言語表現の意味の拡張のメカニズムの解明を試みた実証的研究である。これまでの言語学の意味論の研究は，語彙の字義通りの意味構造と語彙を構成要素とする文の字義通りの意味構造の分析が主眼となっている。しかし，従来の意味研究においては，言葉の創造性を反映する転義や概念の拡張にかかわる語彙レベルと文レベルの意味構造の解明は本格的にはなされていない。

本論文は，日常言語の視覚と空間認知にかかわる言語現象の体系的な記述と綿密な分析に基づいて，語彙レベルと文レベルにおける日常言語の意味の拡張のメカニズムの解明を試みている。本論文では，日常言語の意味の拡張にかかわる言語現象の中でも特に注目される現象として，視覚表現の多義性にかかわる意味の拡張関係（特に，視覚表現の字義通りの意味から，認識や理解を中心とする言語主体の主観的な意味への拡張関係）を，認知言語学の意味モデルによって体系的に分析している。

視覚表現の多義性に関するこれまでの研究では，この種の意味の拡張関係は，知覚の経験のドメインから高次の認知ドメインへのメタファー的な変換のプロセスによって規定する分析が中心になっている。この意味モデルに基づく分析（例えば，Sweetser(1990) の分析）は，問題の変換の対象である知覚の経験のドメインと高次の認知ドメインの間（即ち，ソース・ドメインとターゲット・ドメインの間）に，この変換を可能とする類似性の認識が存在することを前提としている。この種の分析は，問題のソース・ドメインとターゲット・ドメインの関係を類似性の変換によって規定するにとどまり，具体的にどのような認知プロセスの統合によって二つのドメインが関連づけられるかに関する説明はなされていない。本論文は，まずこの問題点を指摘し，視覚動詞とこれに関連する視覚表現の多義性と意味変化の広範な言語データの分析に基づき，知覚のドメインから認識，理解のドメインの意味に至る視覚表現の転義の過程を，具体的な経験のドメインからより主観的で抽象的な経験のドメインへの転移を可能とする近接性の認識に基づく意味の複合的な拡張関係によって規定している。

これまでの言語学の研究におけるメトニミーの分析は，主に部分的な情報から全体的な情報の理解に至る慣用表現，問題の意味内容が文脈から独立して推定可能な省略表現，修辞的な言葉の綾にかかわる慣用表現などの意味の転用プロセスの分

析には適用されているが，視覚表現にかかわる意味の複合的な転用プロセスの規定は体系的にはなされていない。本研究は，特に後者の言語現象にかかわる意味の転用プロセスをメトニミー・モデルによって明らかにした研究として注目される。また，従来の意味分析では，メタファーやメトニミーを特徴づける意味関係の規定は，転義にかかわる意味のドメインの間の類似関係ないしは近接関係の局所的なリンクによって記述するにとどまり，問題の複数の意味のドメインが言語主体の意味直観を反映する概念構造をどのように特徴づけているかに関する体系的な規定はなされていない。本研究では，言語主体の意味直観を特徴づける転義にかかわる概念構造を，単なる局所的なリンクの関係ではなく，類似性と近接性の認識に基づく意味の複合的な拡張関係によって規定し，この意味の複合的な拡張関係を，認知言語学の意味モデルの中心をなす放射状カテゴリーのネットワークモデルによって定式化している。

本研究ではさらに，知覚の経験に基づく意味現象として，空間のドメインからの移動と出現にかかわる言語表現の転義のプロセスを，メタファーとメトニミーの意味拡張のネットワークモデルに基づいて分析している。移動，出現にかかわる言語表現の意味は，基本的には空間領域を境界によって限定する物理的なドメインを背景として規定される。本研究では，移動，出現にかかわる言語表現の広範なデータの分析を通して，物理的な空間のドメインが認知主体によって主観的に意味づけされていくプロセス（即ち，物理的な容器のイメージスキーマの発現，容器のスキーマのサブドメインの背景化，容器のスキーマの外部ドメインの前景化，容器のスキーマのメタファー的変換，容器のスキーマのサブドメインの焦点化，等）を明らかにしている。本研究は，この種のイメージスキーマの発現，前景化・背景化，変換，焦点化，等の認知プロセスを反映する意味の拡張リンクに基づく多義性のネットワーク・モデルを提示し，このネットワーク・モデルに基づき，移動，出現にかかわる言語表現の原義と派生的な意味の分布関係を明らかにしている。また，以上の原義と派生的な意味の相互関係の分析を通して，従来の言語学の意味研究では明らかにされていない多義性に関する二種類の意味現象（類義性と同音異義性にかかわる現象）を体系的に区別する経験的な基準を提示している。

本研究は，共時的な観点からみた言葉の意味の拡張と多義性に関する研究であるが，この研究成果は，通時的ないしは歴史的な観点からみた意味変化の研究への基礎的研究としても注目される。さらに，本研究は，言葉の意味の獲得過程と言葉の創造性の解明を図る言語習得と認知発達の関連分野の研究への基礎的な研究としても重要な役割をになう。

本申請者が所属する環境情報認知論講座の目的の一つは，言語，知覚，思考，推論等にかかわる人間の知のメカニズムの解明にあるが，本研究は，この目的に沿った基礎的研究として高く評価できると共に，今後の言語学と認知科学の関連分野への貢献がさらに期待される。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成14年１月15日，論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果合格と認めた。